

## 樺の木の話

### 名前の由来

カバあるいはカンバという名前の由来については、古名＝カニハの転訛、あるいは特徴的なカハ（皮）に因むなどの説があるが、はっきりしないそうです。英名は（birch）バーチです。

日本産のカバノキ属は、シラカンバ、ウダイカンバ、ダケカンバ、ミズメ、オノオレカンバ、ヤエガワカンバなど七種を数えます。

### シラカンバ

本州中部地方以北と北海道に分布する。山火事や地表攪乱の跡地など、直射日光が注ぐ裸地で、他の樹木に先駆けて定着する典型的な先駆樹パイオニアです。しばしば純林を構成するが、やがて遅れて定着した他の樹種に置き換わっていく。生育に強い光が不可欠なので、たとえ親木の下でも、上層が枝葉に覆われ直射日光が届かない林床では生き続けることができないからです。シラカンバ林を維持するためには、人手を加えずに枝葉を存分に繁らせる厳重な保護は逆効果で、林冠を覆う親木を思い切って間引くなど林床にたっぷり日光が注ぐような手入れをしてやる必要があります。

### ウダイカンバ

シラカンバとほぼ同じ地域に分布するほか、南千島と樺太に分布する。名に冠されるウダイは、鶺鴒の松明として使われたことを意味する鶺松明うだいまつに由来するとも、雨中で松明に使えるほど燃えやすいことを意味する雨松明うだいまつに由来するとも言われます。いずれの説も、樹皮が非常に燃えやすく、灯火に用いられたことに因む点では共通します。シラカンバよりも長命で、高さ30m、胸高直径1mを超える大木も稀ではありません。

### ダケカンバ

四国、本州（中部以北）、北海道に分布し山岳林を構成する。名に冠されるダケは、自生場所の岳を意味します。シラカンバよりも長命で、日高地方の天然林では樹齢二百年を超えるものがみられたらしい。

### ミズメ

本州、四国、九州に分布し、北海道には自生していないので、詳しい説明は割愛させていただきます。

### 樺の木の建材利用

#### 「ウダイカンバとミズメ」

材は良材として定評があり、その大径木は高値で取引されます。両種とも、やや重厚な部類に属し、強度が高い。また均質で加工しやすく、寸法安定性が高い。家具材やピアノのハンマーシャンクなどの楽器の部材として重用される。サクラ類と同じように線形皮目という横向きの短い細紐状の模様が樹皮に見られ、材の性質もサクラに似ていることから、ミズメザクラあるいは単にサクラ材という名称で流通している場合もある。

## 「シラカンバ」

シラカンバ材は、ウダイカンバやミズメより軽軟である。形成層潜孔虫と総称される昆虫の活動によって誘発されるピスフレックという異常組織が褐色の斑点または筋となって材面に頻出するのが欠点で、用材として評価は低い。割り箸、キャンディの匙や棒などに汎用されている。

## 「ダケカンバ」

雑カバの名で流通し、シラカンバと同様に使われるが、通直で色のよいものはウダイカンバと同じような扱い、使われ方をしている。

## 「オノオレカンバ」

名は、斧が折れるほど堅いことに由来します。その真偽はともかく、材は緻密で、櫛、金槌の柄、算盤珠の適材として重宝されてきたほか、雪国でそりなどの強度を要する用具類にも使われてきました。まだカバノキ材全般は、魚の燻製のよい燻煙材として知られます。

### <カバノキの多様な利用>

カバノキ類の樹皮は雁皮<sup>がんぴ</sup>と呼ばれいろんな用途に重宝されてきた。厚くて丈夫なウダイカンバの樹皮は、各地で屋根葺きに使われたほか、曲物の技法で容器や鍋に加工されました。

またカバノキならではのユニークな利用として、樹液の飲用が挙げられる。春先の開葉前にカバノキに材まで達する傷をつけると、多量の樹液が流出する。枝振りのよい元気な立木1本から、一シーズンで百リットルを超える量の樹液を採取することができる。一年のうち春先の一時期だけ採れるこの山の幸は、古くから北海道のアイヌ民族をはじめ、北欧やロシアなど北方域の人々に愛飲されてきた。現在では、工業的に製品化され、小瓶入りの健康飲料として市販されています。



シラカンバ

ダケカンバ

2018年9月5日北海道を襲った台風21号による、野幌森林公園で倒れたシラカンバ（左）とダケカンバ（右）。芯の赤い部分が、サクラと称し建材や家具材として利用されます。（ウダイカンバはもっと赤味が多い為、マカバと呼ばれます。）

参考資料：海青社刊「日本有用樹木誌」、誠文堂新光社刊「木材大事典 170」

文責：富山康夫